

妙法蓮華經。方便品。第二

爾の時に世尊、三昧より安詳として起つて、舍利弗に告げた
まわく、

諸佛の智慧は甚深無量なり。其の智慧の門は難解難入なり。
一切の聲聞・辟支佛の知ること能わざる所なり。所以は何ん、
佛會て百千萬億無数の諸佛に親近し、盡くして諸佛の無量の
道法を行じ、勇猛精進して、名稱普く聞えたまえり。甚深
未曾有の法を成就して、宜しきに隨つて説きたもう所、意趣
解り難し。

舍利弗、吾成佛してより已來、種種の因縁・種種の譬諭をも
つて、廣く言教を演べ、無数の方便をもつて、衆生を引導して
諸の著を離れしむ。所以は何ん、如來は方便・知見波羅蜜、
皆已に具足せり。

舍利弗、如來の知見は廣大深遠なり。無量・無礙・力・
無所畏・禪定・解脱・三昧あつて深く無際に入り、一切
未曾有の法を成就せり。

舍利弗、如來は能く種種に分別し、巧に諸法を説き言辭柔軟
にして、衆の心を悦可せしむ。舍利弗、要を取つて之を言わ
ば、無量無邊未曾有の法を、佛悉く成就したまえり。止みな
ん、舍利弗、復説くべからず。所以は何ん、佛の成就したまえ
る所は、第一希有難解の法なり。唯佛と佛と乃し能く諸法の
實相を究盡したまえり。所謂諸法の如是相・如是性・如是體・
如是力・如是作・如是因・如是縁・如是果・如是報・如是
本末究竟等なり。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて
言わく、

世雄は量るべからず 諸天及び世人

一切衆生の類 能く佛を知る者なし

佛の力・無所畏 解脱・諸の三昧

及び佛の諸餘の法 能く測量する者なし

本無数の佛に従って 具足して諸道を行じたまえり

甚深微妙の法は 見難く了すべきこと難し

無量億劫に於て 此の諸道を行じ已って

道場にして果を成ずることを得て

我已に悉く知見す

是の如き大果報 種種の性相の義

我及び十方の佛 乃し能く是の事を知しめせり

是の法は示すべからず 言辭の相寂滅せり

諸餘の衆生類は 能く得解することあることなし

諸の菩薩衆の 信力堅固なる者をば除く

諸佛の弟子衆の 會て諸佛を供養し

一切の漏已に盡くして 是の最後身に住せる

是の如き諸人等 其の力堪えざる所なり

假使世間に満てらん 皆舍利弗の如くにして

思を盡くして共に度量すとも

佛智を測ること能わじ

正使十方に満てらん 皆舍利弗の如く

及び餘の諸の弟子 亦十方の刹に満てらん

思を盡くして共に度量すとも 亦復知ること能わじ

辟支佛の利智にして 無漏の最後身なる

亦十方界に満ちて 其の數竹林の如くならん

斯れ等共に一心に 億無量劫に於て

佛の實智を思わんと欲すとも

能く少分をも知ることなけん

新發意の菩薩の 無數の佛を供養し

諸の義趣を了達し 又能く法を説かんもの

稻麻竹葦の如くにして 十方の刹に充滿せん

一心に妙智を以て 恒河沙劫に於て

咸く皆共に思量すとも 佛智を知ること能わじ

不退の 諸の菩薩 其の數恒沙の如くにして

一心に共に思求すとも 亦復知ること能わじ

又舍利弗に告ぐ 無漏不思議の

甚深微妙の法を 我今已に具え得たり

唯我是の相を知れり 十方の佛も亦然なり

舍利弗當に知るべし 諸佛は語 異ることなし

佛の所説の法に於て 當に大信力を生ずべし

世尊は法久しうして後

要ず當に眞實を説きたもうべし

諸の聲聞衆 及び縁覺乘を求むる者に告ぐ

我苦縛を脱し 涅槃を速得せしめたることは

佛方便力を以て 示すに三乗の教を以てす

衆生處處の著

之を引いて出ずることを得せしめんとなり

爾の時に大衆の中に、 諸の聲聞・漏盡の阿羅漢・

阿若憍陳如等の千二百人、 及び聲聞・辟支佛の心を發せる比丘

・比丘尼・優婆塞・優婆夷あり。 各是の念を作さく、

今者世尊何が故ぞ慰勸に方便を稱歎して、 是の言を作した

もう。 佛の得たまえる所の法は甚深にして解り難く、 言説し

たもう所あるは意趣知り難し。 一切の聲聞・辟支佛の及ぶこ

と能わざる所なり。 佛、 一解脱の義を説きたまいしかば、

我^{われ}等^らも亦^{また}此^この法^{ほう}を得^えて涅槃^{ねはん}に到^{いた}れり。而^{しか}るに今^{いま}是^この義^ぎの所^{しよ}趣^{しゆ}を知ら^しず。

爾^その時^{とき}に舍利^{しゃり}弗^{ぼつ}、四^{しゆ}衆^{じゆ}の心^{こころ}の疑^{うたがひ}を知^しり、自^{みずか}らも亦^{また}未^{いま}だ了^{さと}らずして、佛^{ほとけ}に白^{もう}して言^{もう}さく、

世^せ尊^{そん}何^{なん}の因^{いん}・何^{なん}の縁^{えん}あつてか、慳^{おんごん}に諸^{しよ}佛^{ぶつ}第^{だい}一^{いつ}の方便^{ほうべん}甚^{じん}深^{しん}微妙^{みひょう}難^{なん}解^げの法^{ほう}を稱^{しやう}歎^{たん}したもう。我^{われ}昔^{むかし}より來^{こゝかた}、未^{いま}だ曾^{かつ}て佛^{ほとけ}

に從^{したが}つて是^{かく}の如^{ごと}き説^{せつ}を聞^ききたてまつらず。今^{いま}者^{しゆ}四^{こと}衆^{ごと}咸^{みな}く皆^{みな}疑^{うたがひ}あり。唯^{ただ}願^{ねが}わくは世^せ尊^{そん}斯^この事^じを敷^ふ演^{えん}したまえ。世^せ尊^{そん}、何^{なん}が

故^{ゆゑ}ぞ慳^{おんごん}に甚^{じん}深^{しん}微妙^{みひょう}難^{なん}解^げの法^{ほう}を稱^{しやう}歎^{たん}したもう。爾^その時^{とき}に舍^{しゃ}利^り弗^{ぼつ}、重^{かさ}ねて此^この義^ぎを宣^のべんと欲^{ほつ}して、偈^げを説^と

いて言^{もう}さく、

慧^え日^{にち}大^{だい}聖^{しょう}尊^{そん} 久^{ひさ}しくあつて乃^{いま}是^この法^{ほう}を説^ときたもう

自^{みずか}ら是^{かく}の如^{ごと}き 力^{りき}・無^む畏^い・三^{まい}昧^{まい}

禪^{ぜん}定^{じやう}・解^げ脱^{だつ}等^{とう}の

不^ふ可^か思^し議^ぎの法^{ほう}を得^えたりと説^ときたもう

道^{どう}場^{じやう}所^{しよ}得^{とく}の法^{ほう}は 能^よく問^とを發^{おこ}す者^{もの}なし

我^わが意^{こころ}測^{はか}るべきこと難^{かた}し 亦^{また}能^よく問^とう者^{もの}なし

問^とうことなけれども而^{しか}も自^{みずか}ら説^といて

所^{しよ}行^{ぎやう}の道^{どう}を稱^{しやう}歎^{たん}したもう

智^ち慧^え甚^{はなは}だ微^み妙^{ひょう}にして 諸^{しよ}佛^{ぶつ}の得^えたまえ^る所^{ところ}なり

無^む漏^{ろう}の 諸^{しよ}の羅^ら漢^{かん} 及^{およ}び涅^ね槃^{はん}を求^{もと}むる者^{もの}

今^{いま}皆^{みな}疑^ぎ網^むに墮^だしぬ 佛^{ほとけ}何^{なに}が故^{ゆゑ}ぞ是^これを説^ときたもう

其^その縁^{えん}覺^{かく}を求^{もと}むる者^{もの} 比^ひ丘^く・比^ひ丘^く尼^に

諸^{しよ}の天^{てん}・龍^{りゆう}・鬼^き神^{じん} 及^{およ}び乾^{けん}闥^{だつ}婆^ば等^{とう}

相^{あい}視^みて猶^{ゆう}豫^よを懷^{いだ}き 兩^{りやう}足^{そく}尊^{そん}を瞻^{せん}仰^{ぎやう}す

是^この事^じ云^い何^かなるべき 願^{ねが}わくは佛^{ほとけ}爲^{ため}に解^げ説^{せつ}したまえ

諸^{しよ}の聲^{しやう}聞^{もん}衆^{じゆ}に於^{おい}て

佛我ほとけわれを第一だいいなりと説ときたもう

我今われいま自ら智ちに於おて 疑惑ぎわくして了さとること能あたわず

是れ究竟くきようの法ほうとや爲せん 是れ所行しよきようの道どうとや爲せん

佛口ぶつく所生しよしよの子こ 合掌がつしよせんぎ瞻仰せんぎして待まちたてまつる

願ねがわくは微妙みみようの音みこえを出いだして

時ときに爲ために實じつの如ごとく説ときたまえ

諸もろの天てん・龍神りゆうじん等とう 其その數恒沙かずごうじやの如ごとし

佛ほとけを求もとむる 諸もろの菩薩ぼさつ 大數だいしゆ八萬まんあり

又また諸もろの萬億國まんのおつこくの 轉輪聖王てんりんじよおうの至いたれる

合掌がつしよし敬心きやうしんを以もつて

具足くそくの道どうを聞ききたてまつらんと欲ほつす

爾その時に佛ほとけ、舍利弗しゃりほつに告つげたまわく、

止やみなん止やみなん、復説またとくべからず。若もし是この事じを説とか

ば、一切世間さいせけんの諸天しよてん及び人およ、皆當みなまさに驚疑きやうぎすべし。

舍利弗しゃりほつ重ねて佛ほとけに白もうして言もうさく、

世尊せそん、唯願ただねがわくは之これを説ときたまえ、唯願ただねがわくは之これを説ときた

まえ。所以ゆえは何ん、是この會えの無數百千萬億阿僧祇まんのおくあそうぎの衆生しゆじよは、

曾かつて諸佛しよぶつを見みたてまつり、諸根猛利しよこんみやうりにして、智慧明ちえみやうり了りなり。

佛ほとけの所説しよせつを聞ききたてまつらば則すなわち能よく敬信きやうしんせん。

爾その時に舍利弗しゃりほつ、重ねて此この義ぎを宣のべんと欲ほつして、偈げを説と

いて言もうさく、

法王無上尊ほうおうむじようそん

唯説ただときたたまえ願ねがわくは慮うらおもしたもうことなかれ

是この會えの無量むりようの衆しゆは 能よく敬信きやうしんすべき者ものあり

佛復ほとけまた、

止やみなん舍利弗しゃりほつ、若もし是この事じを説とかば、一切世間さいせけんの天てん・人にん

・阿修羅あしゆら、皆當みなまさに驚疑きやうぎすべし。増上慢ぞうじよまんの比丘びくは將まさに大坑だいきやうに墜お

つべし。

爾の時に世尊、重ねて偈を説いて言わく、

止みなん止みなん説くべからず

我が法は妙にして思い難し

諸の増上慢の者は 聞いて必ず敬信せし

爾の時に舍利弗、重ねて佛に白して言さく、

世尊、唯願わくは之を説きたまえ、唯願わくは之を説きた

まえ。今此の會中の我が如き等比百千萬億なるは、世世に已

に會て佛に従いたてまつりて化を受けたり。此の如き人等

必ず能く敬信し、長夜安穩にして饒益する所多からん。

爾の時に舍利弗、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説

いて言さく、

無上兩足尊 願わくは第一の法を説きたまえ

吾は爲れ佛の長子なり

唯分別し説くことを垂れたまえ

是の會の無量の衆は 能く此の法を敬信せん

佛已に會て世世に 是の如き等を教化したまえり

皆一心に合掌して 佛語を聽受せんと欲す

我等千二百 及び餘の佛を求むる者あり

願わくは此の衆の爲の故に

唯分別し説くことを垂れたまえ

是れ等此の法を聞きたてまつらば

則ち大歡喜を生ずべし

爾の時に世尊、舍利弗に告げたまわく、

汝已に慇懃に三たび請じつ、豈に説かざることを得んや。

汝今諦かに聽き、善く之を思念せよ。吾當に汝が爲に分別

し解説すべし。

此の語を説きたもう時、會中に比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷、五千人等あり。即ち座より起つて佛を禮して退きぬ。所以は何ん、此の輩は罪根深重に、及び増上慢にして、未だ得ざるを得たりと謂い、未だ證せざるを證せりと謂えり。此の如き失あり、是を以て住せず。世尊默念として制止したまわず。

爾の時に佛、舍利弗に告げたまわく、

我が今此の衆は復枝葉なく、純ら貞實のみあり。舍利弗、是の如き増上慢の人は、退くも亦佳し。汝今善く聽け、當に汝が爲に説くべし。

舍利弗の言さく、

唯然世尊、願樂わくは聞きたてまつらんと欲す。

佛、舍利弗に告げたまわく、

是の如き妙法は、諸佛如來、時に乃し之を説きたもう。優曇鉢華の時に一たび現ずるが如きのみ。舍利弗、汝等當に信ずべし、佛の所説は言虚妄ならず。舍利弗、諸佛の隨宜の説法は意趣解り難し。所以は何ん、我無數の方便・種種の因縁・譬諭・言辭を以て諸法を演説す。是の法は思量分別の能く解する所に非ず。唯諸佛のみましまして、乃し能く之を知しめせり。

所以は何ん、諸佛世尊は、唯一大事の因縁を以ての故に世に出現したもう。舍利弗、云何なるをか、諸佛世尊は唯一大事の因縁を以ての故に、世に出現したもうと名くる。諸佛世尊は、衆生をして佛知見を開かしめ清淨なることを得せしめんと欲するが故に、世に出現したもう。衆生をして佛知見を示さんと欲するが故に、世に出現したもう。衆生をして佛知見を悟らせめんと欲するが故に、世に出現したもう。

う。衆生をして佛知見の道に入らしめんと欲するが故に、世に出現したもう。舍利弗、是れを諸佛は唯一大事の因縁を以ての故に、世に出現したもうとなづく。

佛、舍利弗に告げたまわく、

諸佛如來は但菩薩を教化したもう。諸の所作あるは常に一事の爲なり。唯佛の知見を以て衆生に示悟したまわんとなり。舍利弗、如來は但一佛乘を以ての故に、衆生の爲に法を説きたもう。餘乘の若しは二、若しは三あることなし。

舍利弗、一切十方の諸佛の法も亦是の如し。

舍利弗、過去の諸佛も、無量無數の方便・種種の因縁・譬諭・言辭を以て、衆生の爲に諸法を演説したもう。是の法も皆一佛乘の爲の故なり。是の諸の衆生の諸佛に従いたてまつりて法を聞きしも、究竟して皆一切種智を得たり。

舍利弗、未來の諸佛の當に世に出でたもうべきも、亦無量無數の方便・種種の因縁・譬諭・言辭を以て、衆生の爲に諸法を演説したまわん。是の法も皆一佛乘の爲の故なり。是の諸の衆生の佛に従いたてまつりて法を聞かんも、究竟して皆一切種智を得べし。

舍利弗、現在十方の無量百千萬億の佛土の中の諸佛世尊の、衆生を饒益し安樂ならしめたもう所多き、是の諸佛も亦無量無數の方便・種種の因縁・譬諭・言辭を以て、衆生の爲に諸法を演説したもう。是の法も皆一佛乘の爲の故なり。是の諸の衆生の佛に従いたてまつりて法を聞けるも、究竟して皆一切種智を得。

舍利弗、是の諸佛は但菩薩を教化したもう。佛の知見を以て衆生に示さんと欲するが故に、佛の知見を以て衆生に悟らしめんと欲するが故に、衆生をして佛の知見の道に入らし

めんと欲するが故なり。

舍利弗、我も今亦復是の如し。諸の衆生に種種の欲・深心の所著あることを知つて、其の本性に隨つて、種種の因縁・譬諭・言辭・方便力を以ての故に、而も爲に法を説く。舍利弗、此の如きは皆一佛乗の一切種智を得せしめんが爲の故なり。舍利弗、十方世界の中には尙お二乗なし。何に況んや三あらんや。

舍利弗、諸佛は五濁の惡世に出でたもう。所謂劫濁・煩惱濁・衆生濁・見濁・命濁なり。是の如し、舍利弗、劫の濁亂の時は、衆生垢重く慳貪嫉妬にして、諸の不善根を成就するが故に、諸佛、方便力を以て、一佛乘に於て分別して三と説きたもう。

舍利弗、若し我が弟子、自ら阿羅漢・辟支佛なりと謂わん者、諸佛如來の但菩薩を教化したもう事を聞かず知らずんば、此れ佛弟子に非ず、阿羅漢に非ず、辟支佛に非ず。

又舍利弗、是の諸の比丘・比丘尼、自ら已に阿羅漢を得たり、是れ最後身なり、究竟の涅槃なりと謂うて、便ち復阿耨多羅三藐三菩提を志求せざらん。當に知るべし、此の輩は皆是れ増上慢の人なり。所以は何ん、若し比丘の實に阿羅漢を得たる有つて、若し此の法を信ぜずといわば、是の處あることなけん。佛の滅度の後、現前に佛なからんをば除く。所以は何ん、佛の滅度の後に、是の如き等の經を受持し讀誦し其の義を解せん者、是の人得難ければなり。若し餘佛に遇わば、此の法の中に於て便ち決了することを得ん。

舍利弗、汝等當に一心に信解し、佛語を受持すべし。諸佛如來は言虚妄なし。餘乘あることなく唯一佛乘のみなり。爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説い

て言のたまわく、

比丘・比丘尼の 増上慢を懷いだくことある

優婆塞の我慢なる 優婆夷の不信なる

是の如かくき四衆等 其の數かず五千あり

自みら其の過を見ず 戒かいに於おいて缺漏有あつて

其の瑕け疵しを護まもり惜おしむ 是この小智しょうちは已すでに出いでぬ

衆中の糟糠そうこうなり 佛ほとけの威徳いとくの故ゆえに去さりぬ

斯この人は福德ふくとく尠すくなくして 是この法ほうを受うくるに堪たえず

此この衆しゆは枝葉しやうなし 唯ただ諸もろの貞實じやうじつのみあり

舍利弗しゃりぶつ善よく聽きけ 諸佛所得しよぶつしよとくの法ほうは

無量むりやうの方便ほうべん力りきをもつて 衆生しゆじやうの爲ために説ときたもう

衆生しゆじやうの心こころの所念しよねん 種種しゆじゆの所行しよぎやうの道どう

若干そこばくの諸もろの欲性よくしやう 先世せんぜの善惡ぜんなくの業ごう

佛ほとけ 悉とく是これを知しりしめし已おわつて 諸もろの縁えん・譬諭ひゆ

言辭ごんじ・方便ほうべん力りきを以もつて 一切さいをして歡喜かんぎせしめたもう

或あるは修多羅しゆたらか 伽陀かだ及びおよ本ほん事じ

本生未會有ほんじやうみぞううを説とき 亦また因縁いんねん

譬諭ひゆ并ならびに祇夜ぎや 優婆提舍經うぱだいしやきやうを説ときたもう

鈍根どんこんにして小法しょうほうを樂ねがい 生死しやうじに貪著とんぢやくし

諸もろの無量むりやうの佛ほとけに於おいて 深妙じんみやうの道どうを行ぎぜずして

衆苦しゆくに惱亂のうらんせらる 是これが爲ために涅槃ねはんを説ときたもう

我われ是この方便ほうべんを設もうけて 佛慧ぶつてに入いることを得えせしむ

未いまだ會かつて汝等なんだち

當まさに佛道ぶつどうを成じやうずることを得うべしと説とかず

未いまだ會かつて説とかざる所以ゆえは

説時未せつじいまだ至いたらざるが故ゆえなり 今正いままさしく是これ其その時ときなり 決定けつじやうして大乘だいじやうを説とく

我が此の九部の法は 衆生に隨順して説く
 大乘に入るに爲れ本なり 故を以て是の經を説く
 佛子の心淨く 柔輒に亦利根にして
 無量の諸佛の所にして 深妙の道を行ずるあり
 此の諸の佛子の爲に 是の大乘經を説く
 我是の如き人 來世に佛道を成ぜんと記す
 深心に佛を念じ 淨戒を修持するを以ての故に
 此れ等佛を得べしと聞いて 大喜身に充徧す
 佛彼の心行を知れり 故に爲に大乘を説く
 聲聞若しは菩薩 我が所説の法を聞くこと
 乃至一偈に於てもせば 皆成佛せんこと 疑なし
 十方佛土の中には 唯一乗の法のみあり
 二なく亦三なし 佛の方便の説をば除く
 但假の名字を以て 衆生を引導したもう
 佛の智慧を説かんが故なり
 諸佛世に出でたもうには
 唯此の一事のみ實なり 餘の二は則ち眞に非ず
 終に小乗を以て 衆生を濟度したまわず
 佛は自ら大乘に住したまえり
 其の所得の法の如き
 定慧の力莊嚴せり 此れを以て衆生を度したもう
 自ら無上道 大乘平等の法を證して
 若し小乗を以て化すること
 乃至一人に於てもせば
 我則ち慳貪に墮せん 此の事は爲めて不可なり
 若し人佛に信歸すれば 如來欺誑したまわず
 亦貪嫉の意なし 諸法の中の惡を斷じたまえり

故に佛十方に於て 獨畏るる所なし
 我相を以て身を嚴り 光明世間を照す
 無量の衆に尊まれて 爲に實相の印を説く
 舍利弗當に知るべし 我本誓願を立てて
 一切の衆をして
 我が如く等しくして異ることなからしめんと欲しき
 我が昔の所願の如き 今者已に満足しぬ
 一切衆生を化して 皆佛道に入らしむ
 若し我衆生に遇えば 盡く教うるに佛道を以てす
 無智の者は錯亂し 迷惑して教を受けず
 我知んぬ此の衆生は 未だ曾て善本を修せず
 堅く五欲に著して 癡愛の故に惱を生ず
 諸欲の因縁を以て 三惡道に墜墮し
 六趣の中に輪廻して 備さに諸の苦毒を受く
 受胎の微形 世世に常に増長し
 薄徳少福の人として 衆苦に逼迫せらる
 邪見の稠林 若しは有若しは無等に入り
 此の諸見に依止して 六十二を具足す
 深く虚妄の法に著して 堅く受けて捨つべからず
 我慢にして自ら矜高し 諂曲にして心不實なり
 千萬億劫に於て 佛の名字を聞かず
 亦正法を聞かず 是の如き人は度し難し
 是の故に舍利弗 我爲に方便を設けて
 諸の盡苦の道を説き 之に示すに涅槃を以てす
 我涅槃を説くと雖も 是れ亦眞の滅に非ず
 諸法は本より來 常に自ら寂滅の相なり
 佛子道を行じ已つて 來世に作佛することを得ん

我方便力あつて 三乗の法を開示す
 一切の諸の世尊も 皆一乗の道を説きたもう
 今此の諸の大衆 皆疑惑を除くべし
 諸佛は語異ることなし 唯一にして二乗なし
 過去無數劫の 無量の滅度の佛
 百千萬億種にして 其の數量るべからず
 是の如き諸の世尊も 種種の縁・譬諭
 無數の方便力をもつて 諸法の相を演説したまいき
 是の諸の世尊等も 皆一乗の法を説き
 無量の衆生を化して 佛道に入らしめたまいき
 又諸の大聖主 一切世間の
 天・人・群生類 深心の所欲を知しめして
 更に異の方便を以て 第一義を助顯したまいき
 若し衆生類あつて
 諸の過去の佛に値いたてまつつて
 若しは法を聞いて布施し 或は持戒・忍辱
 精進・禪・智等 種種に福德を修せし
 是の如き諸人等 皆已に佛道を成じき
 諸佛滅度し已つて 若し人善軟の心ありし
 是の如き諸の衆生 皆已に佛道を成じき
 諸佛滅度し已つて 舍利を供養する者
 萬億種の塔を起てて 金・銀及び頗黎
 碑磔と礪磑 玫瑰・瑠璃珠とをもつて
 清淨に廣く嚴飾し 諸の塔を莊校し
 或は石廟を起て 栴檀及び沈水
 木密并に餘の材 甌瓦・泥土等をもつてするあり
 若しは曠野の中に於て 土を積んで佛廟を成し

乃至童子ないしどうじの戲たわむれに 沙すなを聚あつめて佛塔ぶつとうと爲せる

是かくの如ごとき諸人等しよにんら 皆みなす已でに佛道ぶつどうを成じじき

若もし人佛ひとほとけの爲ための故ゆえに 諸もろの形像ぎやうぞうを建立てんりゆうし

刻彫こくちゆうして衆相しゆそうを成なせる 皆みなす已でに佛道ぶつどうを成じじき

或あるは七寶ぼうを以もつて成なし 鍮鈇ちゆうしやく・赤白銅しやくびやくどう

白鐵びやくどうおよ及び鉛錫えんじやく 鐵木てつもく及および與泥いでい

或あるは膠漆布きやうしつぷを以もつて 嚴飾ごんじきして佛像ぶつぞうを作つくれる

是かくの如ごとき諸人等しよにんら 皆みなす已でに佛道ぶつどうを成じじき

綵畫さいえして佛像ぶつぞうの 百福莊嚴ひやくしよくごんの相そうを作なすこと

自みすらも作なし若もしは人ひとをしてもせる

皆みなす已でに佛道ぶつどうを成じじき

乃至童子ないしどうじの戲たわむれに 若もしは艸木そうもく及および筆ふで

或あるは指ゆびの爪甲つめを以もつて 畫えがいて佛像ぶつぞうを作なせる

是かくの如ごとき諸人等しよにんら 漸漸ぜんぜんに功德くどくを積つみ

大悲心だいひしんを具足ぐそくして 皆みなす已でに佛道ぶつどうを成じじて

但ただ諸もろの菩薩ぼさつを化けし 無量むりやうの衆しゆを度脫どだつしき

若もし人塔廟ひととうみやう 寶像ぼうぞう及および畫像えぞうにおいて

華け・香かう・旛蓋ばんがいを以もつて 敬心きやうしんにして供養くやうし

若もしは人ひとをして樂がくを作なさしめ 鼓つづめを擊うち角貝かくがいを吹ふき

簫しやう・笛ちやく・琴きん・箜篌くわうどう 琵琶びわ・鏡にやう・銅鈸どうぼつ

是かくの如ごとき衆もろの妙音みやうおん 盡ことごとく持もつて以もつて供養くやうし

或あるは歡喜かんぎの心こころを以もつて 歌唄かばいして佛德ぶつとくを頌じゆし

乃至ないし一小音しやうおんを以もつてせし 皆みなす已でに佛道ぶつどうを成じじき

若もし人散亂ひとさんらんの心こころに 乃至ないし一華いっげを以もつて

畫像えぞうに供養くやうせし 漸ようやく無數むしゆの佛ほとけを見みたてまつりき

或あるは人ひとあつて禮拜らいはいし 或あるは復また但ただ合掌がっしやうし

乃至ないし一手しゆを舉あげ 或あるは復また少すこし頭こうべを低たれて

此れを以て像に供養せし

漸く無量の佛を見たてまつり

自ら無上道を成じて 廣く無数の衆を度し

無餘涅槃に入ること

薪盡きて火の滅ゆるが如くなりき

若し人散亂の心に 塔廟の中に入って

一たび南無佛と稱せし 皆已に佛道を成じき

諸の過去の佛の 現在或は滅後に於て

若し是の法を聞くこと有りし 皆已に佛道を成じき

未來の諸の世尊 其の數量あることなけん

是の諸の如來等も 亦方便して法を説きたまわん

一切の諸の如來 無量の方便を以て

諸の衆生を度脱して

佛の無漏智に入れたまわん

若し法を聞くことあらん者は

一りとして成佛せずということなけん

諸佛の本誓願は 我が所行の佛道を

普く衆生をして

亦同じく此の道を得せしめんと欲す

未來世の諸佛 百千億

無数の諸の法門を説きたもうと雖も

其れ實には一乗の爲なり

諸佛兩足尊 法は常に無性なり

佛種は縁に従つて起ると知しめす

是の故に一乗を説きたまわん

是の法は法位に住して 世間の相常住なり
道場に於て知しめし已つて

導師方便して説きたまわん

天人の供養したてまつる所の 現在十方の佛

其の數恒沙の如く 世間に出現したもうも

衆生を安穩ならしめんが故に

亦是の如き法を説きたもう

第一の寂滅を知しめして 方便力を以ての故に

種種の道を示すと雖も 其れ實には佛乘の爲なり

衆生の諸行 深心の所念

過去所習の業 欲性精進力

及び諸根の利鈍を知しめして 種種の因縁

譬諭亦言辭を以て 應に隨つて方便して説きたもう

今我も亦是の如し 衆生を安穩ならしめんが故に

種種の法門を以て 佛道を宣示す

我智慧力を以て 衆生の性欲を知つて

方便して諸法を説いて 皆歡喜することを得せしむ

舍利弗當に知るべし 我佛眼を以て觀じて

六道の衆生を見るに 貧窮にして福慧なし

生死の險道に入つて 相續して苦斷えず

深く五欲に著すること 犂牛の尾を愛するが如し

貪愛を以て自ら蔽い 盲瞶にして見る所なし

大勢の佛 及び斷苦の法を求めず

深く 諸の邪見に入つて

苦を以て苦を捨てんと欲す

是の衆生の爲の故に 而も大悲心を起しき

我始め道場に坐し 樹を觀じ亦經行して

三七日の中に於て 是の如き事を思惟しき

我が所得の智慧は 微妙にして最も第一なり

衆生の諸根鈍にして 樂に著し癡に盲いられたり
 斯の如きの等類 云何して度すべきと
 爾の時に諸の梵王 及び諸の天帝釋
 護世四天王 及び大自在天
 并に餘の諸の天衆 眷屬百千萬
 恭敬合掌し禮して 我に轉法輪を請す
 我即ち自ら思惟すらく 若し但佛乘を讚めば
 衆生苦に歿在し 是の法を信ずること能わじ
 法を破して信ぜざるが故に 三惡道に墜ちなん
 我寧ろ法を説かずとも 疾く涅槃にや入りなん
 尋いで過去の佛の 所行の方便力を念うに
 我が今得る所の道も 亦三乗と説くべし
 是の思惟を作す時 十方の佛皆現じて
 梵音をもつて我を慰諭したもう 善哉釋迦文
 第一の導師 是の無上の法を得たまえども
 諸の一切の佛に隨つて 方便力を用いたもう
 我等も亦皆 最妙第一の法を得れども
 諸の衆生類の爲に 分別して三乗と説く
 少智は小法を樂つて 自ら作佛せんことを信ぜず
 是の故に方便を以て 分別して諸果を説く
 復三乗を説くと雖も 但菩薩を教んが爲なりと
 舍利弗當に知るべし 我聖師子の
 深淨微妙の音を聞いて 喜んで南無佛と稱す
 復是の如き念を作す 我濁惡世に出でたり
 諸佛の所説の如く 我も亦隨順して行ぜんと
 是の事を思惟し已つて 即ち波羅奈に趣く
 諸法寂滅の相は 言を以て宣ぶ可からず

方便力を以ての故に 五比丘の爲に説きぬ

是れを轉法輪と名づく 便ち涅槃の音

及以阿羅漢 法僧差別の名あり

久遠劫より來 涅槃の法を讚示して

生死の苦永く盡くすと 我常に是の如く説きき

舍利弗當に知るべし 我佛子等を見るに

佛道を志求する者 無量千萬億

咸く恭敬の心を以て 皆佛所に來至せり

曾て諸佛に従いたてまつりて

方便所説の法を聞けり

我即ち是の念を作さく 如來出でたる所以は

佛慧を説かんが爲の故なり

今正しく是れ其の時なり

舍利弗當に知るべし 鈍根小智の人

著相憍慢の者は 是の法を信すること能わず

今我喜んで畏なし 諸の菩薩の中に於て

正直に方便を捨てて 但無上道を説く

菩薩是の法を聞いて 疑網皆已に除く

千二百の羅漢 悉く亦當に作佛すべし

三世諸佛の 説法の儀式の如く

我も今亦是の如く 無分別の法を説く

諸佛世に興出したもうこと

懸遠にして値遇すること難し

正使世に出でたもうとも

是の法を説きたもうこと復難し

無量無數劫にも 是の法を聞くこと亦難し

能く是の法を聽く者 斯の人亦復難し

譬えは優曇華の一切皆愛樂し

天・人の希有にする所として

時時に乃し一たび出づるが如し

法を聞いて歡喜し讚めて 乃至一言をも發せば

則ち爲れ已に 一切三世の佛を供養するなり

是の人甚だ希有なること 優曇華に過ぎたり

汝等疑あることなかれ 我は爲れ諸法の王

普く諸の大衆に告ぐ 但一乗の道を以て

諸の菩薩を教化して 聲聞の弟子なし

汝等舍利弗 聲聞及び菩薩

當に知るべし是の妙法は 諸佛の祕要なり

五濁の惡世には 但諸欲に樂著せるを以て

是の如き等の衆生は 終に佛道を求めず

當來世の惡人は 佛説の一乘を聞いて

迷惑して信受せず 法を破して惡道に墮せん

慚愧清淨にして 佛道を志求する者あらば

當に是の如き等の爲に 廣く一乗の道を讚むべし

舍利弗當に知るべし 諸佛の法是の如く

萬億の方便を以て 宜しきに隨つて法を説きたもう

其の習學せざる者は 此れを曉了すること能わじ

汝等既已に 諸佛世の師の

隨宜方便の事を知りぬ 復諸の疑惑なく

心に大歡喜を生じて 自ら當に作佛すべしと知れ

妙法蓮華經卷第一